

窓の外には、いまを盛りと咲き誇るソメイヨシノの街路樹が、ずらりと並んでいる。その下を歩いているのは学生たちだろうか。花たちを眩しげに見上げていた。時折、並木道を吹き抜けるさわやかな風が、無数の花を揺らせている。

その桜並木を縫って、オレンジ色の西日が診察室に差し込んでいた。大学病院の一室だ。

「遺伝子欠損性骨粗鬆症？」赤ん坊を抱いた川内葉子は怪訝そうに問い返した。医師の岡本は言った。

「はい。遺伝子検査で見つかりました。英語名の gene defect osteoporosis を略して GDO と呼ばれています。麻里ちゃんは、この GDO のキャリアなのです。お気の毒ですが、非常に希な難病です」

「…どういうことでしょうか」

「麻里ちゃんの遺伝子の一部に傷がついているのです。遺伝子というものは大部分が実際には使われないもので、傷があっても普通に生きる人がほとんどなのです。しかし、GDO の患者さんの場合、その傷が不運なことに、カルシウムの取込みに重要と言われる部分についているのです。始めは普通の人と変わらないのですが、やがて GDO を発症します。そうなるとカルシウムを食物から吸収出来なくなります。

その結果、自分の骨からカルシウムを補給するしかないため、急速に全身の骨が脆くなるのです。ただ寝ているだけでも自分の体重で倒るところに骨折を頻発し、亡くなります」

「…！」

『なんとということなの』あまりのことに、葉子は、血の気が引いて手足や顔が冷たくなるのを感じた。目眩がして世界が歪んでいく。奪おうとする何かから守るように、腕の中の麻里を胸に押し当て抱き締

めた。

岡本自身、GDOの患者は初めてだった。生まれたばかりのこんな赤ん坊だが、もうすでに寿命が決定づけられている。あまりにも非情だ。目の前に座る葉子が哀れで、岡本は眉をひそめた。

呆然としている葉子に、優しく告げた。

「大変なことですから、ご主人にも聞いていただいた方が良いでしょう。わたしもこれから文献を調べてみます。もし明日お時間があれば、お二人で来ていただませんか」

「…そうですね。わかりました。明日、改めてお伺いします」

葉子は、そう答えると、混乱と驚きを胸に抱えたまま、病院から帰った。

* * *

家に帰り、動転が去って、初めて悲しみが襲ってきた。

麻里を寝かせたベビー・ベッドの柵に力なくもたれて、葉子は突っ伏した。生まれてきたばかりだというのに、そんな希な病気になってしまうなんて、運命とは何と残酷なものなのだろう…。

そんな事にはお構いなしと言わんばかりに、きょうの夕焼けは皮肉なくらい美しかった。何も知らずにすやすやと眠っている麻里の小さな顔に柔らかな光を注いでいる。

葉子は夕飯の支度をする気力もなかった。きょうは機械に任せよう。キッチンの自動調理器のスイッチを入れた。

調理器は静かなモーター音をたてて、内蔵の冷蔵庫から食材を処理室に送った。処理室のフード・プロセスが食材の下ごしらえを行い、オープンに送る。調理器は、調理が終われば、食べる時まで料理を保温しながら待っている。

やがて、夜になり、仕事を終えた夫の健介が帰宅した。葉子が病院を出た時に診察の結果を電話で知らせてあったので、健介は事の次第を既に知っていた。

それまでの心細さが堰を切ったように溢れ出て、葉子は健介の胸にすがって泣いた。

二人はともに三十歳。麻里は初めての子どもだった。まだ一ヶ月だ。つい先月 二〇四七年の三月、麻里が誕生したときには、二人は喜びに溢れていた。これからこの子がどんな人生を歩んでいくのか、色々浮かんでくる想像。毎日が楽しかった。きょう、一転して、それらがどす黒く塗りつぶされてしまった。健介も泣きたいくらい悲しかったが、自分も泣いては葉子の心を支えられない。抱きとめたまま、葉子の気持ちが悪く着くのを待った。とにかく情報が欲しい。助かる道はないのか。その夜、二人はなかなか寝付けなかった。

* * *

翌日、二人は、麻里を抱きながら、桜並木を通り、病院を訪れた。二人は会議室に案内された。葉子は、待つ間、窓辺に立ち、青空をゆつたりと流れていく雲を、麻里に見せていた。まだ一ヶ月では、そんな遠くのものは見えていないだろう。葉子は、小さな声で話しかけた。「ほら麻里、空があんなに青くてきれいでしょ。あの白いのは雲よ。どこへいくのかしらね」

やがて岡本医師がやってきた。席に着き、言った。

「すみません。お待たせしました」

健介たちはテーブルの岡本の向かい側にかけた。

岡本は、二人を前に、昨日よりさらに具体的な説明を始めた。

「まず、検査結果をご確認下さい」

遺伝子配列がびつしりと並べられた検査結果の紙を二人に見せ、その中の一カ所に黄色のマーカーでアンダーラインを引いた。

「ここが正常な人とは違い、変異しています。これがGDOキャリアを示す欠損箇所です。つまり遺伝子についた傷です。」

お二人の体の遺伝子が麻里ちゃんに渡された時に、偶発的に起こったものと考えられます。いわば事故です。極めて希な事故です。それでも、欠損箇所があっても無害なケースがほとんどなのです。何

故かというと、遺伝子と機能の関係を明らかにする研究が進んでいますが、今のところ、遺伝子の約九十パーセントは実際には使われてい

ない無意味な部分と考えられているからです。

しかし、GDOの場合、たまたま重要な部分、つまりカルシウムの取込みに関係するポイントに欠損が起こっています。まったくの偶然の産物です。

このようなGDOキャリアは一億人にひとりという、極めて低い確率で起こる病気です。何とも不運としか言いようがなく、おかけする言葉も見つかりません」

岡本は、二人が理解出来るよう慎重に言葉を選びながら話していた。健介も葉子も、ひと言も聞き漏らすまいと、真剣に耳を傾けていた。「まず、健康な人体での、カルシウムのバランスについてご説明します。

二つの言葉を憶えてください。

活性型ビタミンD₃

副甲状腺

です。

健康な人はカルシウムを含んだ食品を口にします。しかし、カルシウムというのは非常に吸収されにくい物質で、ただ食べても、体外に排出されてしまいます。

ここで登場するのが、活性型ビタミンD₃です。これは体内 肝臓と腎臓で生産されるビタミンです。活性型ビタミンD₃は十二指腸の粘膜に作用して、カルシウムを吸収し、代謝（体内の化学反応。栄養を実際に役に立つ形に変えること）できるように働きます。

すると、血液中のカルシウム濃度が上がり、健康な状態になります。ところが、カルシウム食品を全く食べないとします。すると、当然、カルシウム不足が起こり、血液中のカルシウム濃度は下がってきます。

この血液中のカルシウム濃度を監視しているのが、副甲状腺……」

岡本は、首を伸ばし、自分の喉仏を指さした。

「ここにある、副甲状腺です。副甲状腺は、カルシウム濃度が下がったことを知ると、副甲状腺ホルモンというものを分泌します。このホルモンは、自分の骨を溶かし、カルシウムを取り出す働きをします。

すると、血液中のカルシウム濃度が上がり、健康な状態になります。
「ご理解いただけますか」

健介と葉子は頷いた。
「要するに、」

『活性型ビタミンD₃』は、体外からカルシウムを取り込んで、カルシウムのバランスを取る

『副甲状腺』は、自分の骨からカルシウムを取りだして、カルシウムのバランスを取る

と言うわけです」

岡本は、ひと呼吸ついた。

「さて…」と再び話し始めた。

「麻里ちゃんは、今のところはまだ、健康な乳児と変わりありません。しかし、これまでの症例を見ると、だいたい十五歳から十八歳にかけてGDOを発症し、カルシウムの代謝障害が起こります。具体的には、なぜか体内で活性型ビタミンD₃が生産されなくなり激減してしまうのです。」

するとカルシウムを含む食物を摂っても、それが体に取り込まれなくなりします。このため、血液中のカルシウム濃度が急速に低下します。すると、それをキャッチした副甲状腺が、副甲状腺ホルモンを分泌し、どんどん骨からカルシウムが奪われていきます。その結果、骨は脆く壊れやすくなっていきます。」

年齢が若いせいで、この過程は非常に速く進み、すぐに寝たきりの生活になり、さらにあまりにスカスカの紙のようになった骨は自分の体重に耐えられず、体中で骨折が起こり始めます。

やがて脊椎や頭蓋骨などの致命的な場所で骨折が起こり、死亡します。」

これまでの症例から、発症してからの平均余命は二年ほどと考えられています」

葉子が眼を見開き、手で口を覆った。

健介が必死に尋ねた。

「治療法はあるのですか」

岡本は、頭を垂れてため息をつき、そしてまた顔を上げた。

「結論から言わないのです」

健介は、唇を開いたまま、凍り付いた。

「症例が極めて少ないということもありますが、何よりもメカニズムが解明されていないことが大きいです。」

これまで色々な方法が試されてきました。

まず、活性型ビタミンD₃が激減するので、対症療法として外から活性型ビタミンD₃製剤を投与することが行われました。しかし、症状に変化は現れませんでした。

また、活性型ビタミンD₃は体内の肝臓と腎臓によって生産されるので、遺伝子欠損によってこの二つの臓器に異常が起こっているのは、という考えから、肝移植および腎移植が行われたこともあります。これもまた効果が現れませんでした。

症例の少なさから、謎の部分が非常に多いのです」

葉子は、抱いている赤ら顔の麻里を見下ろし、唇を噛んだ。麻里は二十歳まで生きられないのか。震えそつになる自分を抑えていた。

「ただ、発症しても延命する方法が一つだけあります」

思わず二人は身を乗り出した。

岡本は、一枚のリーフレットを資料の中から取りだし、二人に渡した。

「N I S S（新国際宇宙ステーション）はご存じですか」

健介が答えた。

「テレビで見たことがあります。日本、EU、アメリカ、ロシアが共同で開発したとか」

「そうです。二〇一〇年に小型のISSが完成しましたが、その後、計画が拡張され、規模にしてISSの五倍におよぶN I S S建設が始まりました。N I S Sは十五年前に完成し稼働しています。そこに今、『パシフィック』という大型居住施設が連結されていることはご存じでしょうか」

「いいえ。それは何ですか」

「『パシフィック』は、五十床のベッドを備えた病院船なのです。医師

や看護師などのスタッフが常駐して、重力の影響を受ける様々な難病の患者さんが無重力状態で暮らしています。国連が管理する宇宙船で、国連が指定する難病のひとにかぎり移住できるのです。GDOも指定疾患の対象になっています。治療費、生活費などは国連が負担してくれます。

そこでなら、麻里ちゃんが発症して脆い骨格になったとしても、生き延びることが可能です」

「本当ですか！」

「はい。ただ、麻里ちゃんが『パシフィック』に移り住むには、かなり厳しい条件が揃わなければなりません。

まず、十分に成長した十三歳以上でなければなりません。

『パシフィック』にはシャトルで向かうのですが、打ち上げ時に強力なG（加速度）がかかります。成人でも失神するほどの激しい力です。これに耐えうる体でなければなりません。小学生の未発達期ですと危険です。実際に、過去に十一歳と十二歳の子どもが打ち上げ時にそれぞれ心臓発作と脳しんとうで亡くなっています。それ以後、『パシフィック』は十二歳以下の患者の受け入れを認めなくなりました。

もう一つの条件は、GDOを発症する前でなければなりません。一般に十五歳を過ぎますと、GDOを発症する危険が迫ってきます。発症すると全身の骨がGに耐えられません。

ですから、移住はわずか十三歳から十四歳の間に行わなければなりません。

しかし、十二歳や十三歳で発症した例もあり、このような場合は、移住が不可能となります」

健介たちは真剣な眼差しで、岡本の顔を見つめていた。まだ希望がある。それを聞いただけで、すがりつかずにいられなかった。

岡本は続けた。

「言うまでもなく、『パシフィック』に移住したら、もう二度と麻里ちゃんに会うことはできません。映像の送受信は出来るので、顔を見ることはできますが、直接会うことは、一生叶いません」

「…！」

健介と葉子は、顔を見合わせた。それはあまりに悲しい宣告だった。

岡本は言った。

「麻里ちゃんには、まだ何年も時間があります。じっくり相談されて結論を出されるとよろしいと思います」

健介は答えた。

「そうですね。まずは麻里を十二歳まで大切に育て、自分で判断できるようにになったら三人で相談しようと思います」

2

「ねえ、お父さん」川内麻里が尋ねた。

「なんだい」

「みつちゃんとか、さやかちゃんがね、『まりちゃんのうちは、たくさん旅行してうらやましいな』って言ったの。」

どうして、うちはこんなに旅行をするの」

健介は後から付いてくる葉子を振り返った。葉子は笑っていた。三人の前には、オーストラリアの巨大な一枚岩、エアーズロックが赤茶色の雄大な姿でそびえ立っていた。

「お父さんたちはね、麻里に世界中の珍しいものや、きれいなものを、全部見せてあげたいんだ」

「ふうん」

* * *

その夜、ホテルの部屋で健介と葉子はそれぞれ、今日一日の疲れをシャワーで洗い流し、ビールで乾杯をした。

「麻里は」

健介が尋ねると、葉子はソファから立ち上がり、麻里のベッドに近づいて様子をうかがった。

「寝たわ」

「六歳か。早いものだな」

「そうですね」

「気持ちちは固まったかい」

そう訊かれて、葉子は眼を伏せた。

「…納得はしたつもりよ。麻里のためだもの仕方ないわ。いざ別れる時はどうなっちゃうかわからないけど」

健介も言った。

「おれもだよ。こうやって麻里を旅行に連れ歩きながら、実は自分を納得させようとしていることに気づいたよ」

健介は立ち上がって窓から夜空を見上げた。星が、無造作にばらまかれたように、天に敷き詰められている。

日本では見えなかった六等星も、ここなら見えそうだ。

「神様がいるのかどうか知らないが、いるとしたら、そいつはとんでもないひねくれ者だよ」

3

川内麻里は十二歳になった。

麻里は、健介と葉子の愛情のもとで、明るく積極的な少女に成長していた。毎月、血液検査と骨密度検査を受けているが正常値で、幸いまだGDOは発症していない。しかし、岡本医師は十二歳で発症した症例もあることから、川内夫婦に、出来るだけ決断を急ぐよう促していた。

桜の季節が来た。

葉子は、マンシヨンの窓から見える、隣の公園の桜をながめていた。日光を浴びて揺れる花たち…。

しかし、葉子の心は華やぐことはなかった。あの、初めて麻里のGDOを知らされた日も、こんな桜のきれいな日だった。桜を見ると、あの日に時間が引き戻されるような気がする。いったい何度、すべてが夢で目覚めたら自分たちはごく普通の家族なのだと、思いこもつとしたことか。

今月、麻里は中学校に進学した。夕べ、健介が言った言葉を思い出した。

「時間は限られている。麻里も中学生だ。ものの道理は理解出来る歳だ。きょうは早く帰るから、麻里にすべてを話さないか」
時が過ぎるのを承知で、夫が言い出すまで、こちらからは言わずに延ばし延ばしにしてきた優柔不断な自分が嫌だった。

家族三人が揃い、夕食を済ませた後、自分の部屋に行こうとした麻里は、健介に呼び止められた。

「麻里、大事な話がある。お父さんの言うことをよく聞くんだ」

葉子も健介の隣に座った。

「今まで言わなかったけど、麻里は、ある病気にかかっているんだ」

健介は話し始めた。

GDOという病気の詳細。

地上で暮らした場合の寿命のこと。

病院船『パシフィック』のこと。

『パシフィック』で暮らせば、長く生きられること。

そして、健介と葉子が、長い時間をかけて、麻里を『パシフィック』に送ろうという決心をしたこと。

麻里は、黙って聞いていた。出し抜けにこんな話を聞かされて頭が混乱している。しかし、話している父と横で麻里を見つめている母が、とても辛そうなことだけはわかった。

父は、最後にこう言った。

「急に聞かされてびっくりしたろう。もちろん今すぐに決めなくても良い。よく考えなさい。分からないことがあつたら、お父さんでもお母さんでも、遠慮なく尋ねるんだよ」

麻里は何も言わず、部屋に戻った。ベッドに身を預けた。

人は死ぬ。そんな当たり前のことだが、今までじっくり考えたこともなかった。あたし、病気なんだ。死ぬんだ…。

『パシフィック』…どんなところなんだろう。二度と地球に戻れない病気の人たちと、お医者さんたちだけの船。

そこでなら長生き出来るという。でも、ひとりぼっちだ。両親とも友だちとも離ればなれになっても、長生きすることのほうが大事なんだろっか。

死ぬのは怖い。いやだ。だけど、みんなが見守ってくれる。

言ってみれば、寒い長生きと温かい死だ。どっちが良いんだろっ。

「わかんないよ。難しすぎるよ」麻里は枕を顔に押し当て、泣き始めた。

* * *

数日後、麻里は夕食の途中で箸をぱたりと置き、言った。

「あたし、『パシフィック』には行かない。GDOで死ぬことになるとしても、最後までお父さんとお母さんと一緒にいたい。それが運命なら、あたしはそれで良いよ」

健介も葉子も、食事の手を止め、驚いて麻里を見つめた。

葉子が言った。

「お母さんたちは、麻里に健康な人と同じ長い人生を送って欲しいのだから『パシフィック』に行つて。それにいつでも映像で会えるのだから」

「それが良いことなの？　ひとりぼっちで、ただ生き続けるだけじゃない」

健介も言った。

「生きていれば、きっと楽しいことも見つかるだろう。友だちもできるだろう。それは、生きていればこそ話なんだよ」

「いやだ！」

「麻里、GDOを発症したら、体中の骨が紙のように弱くなって次々と折れていくのよ。長くて、ものすごい苦しみよ。麻里は二十歳を迎えられないのよ」

「じゃあ、どうすれば良いの？　ひとりぼっちと長い苦しみと、どっちを選べば良いの？　どつして二つしか無いの？」

バン！ と席を蹴つて、麻里は立ち上がった。

「もついい。あたし、自分で三つ目を作る！」そつ言つたかと思つと、

麻里は、部屋を駆け出て、裸足のまま玄関を飛び出して行った。

「麻里！」

健介と葉子は慌てて後を追った。麻里の姿が見えない。

「どこだ！」

「あなたエレベーターだわ」

エレベーターに駆けつけたが、表示が六、七、八…と登っている。このマンションは二十階建てだ。

昇降ボタンを叩いたが、表示は登り続けている。

「屋上だ。おれは階段を登る、お前はエレベーターで上がって来るんだ！」

健介は叫ぶと階段を駆け上がり始めた。

葉子はエレベーターが下降してくるのをイライラしながら待った。

健介と葉子は、ほぼ同時に屋上に着いた。夜空の下、夜景が目映い。風が吹き続け、耳元で風鳴りの音がする。

「麻里！」

麻里は、どうやって越えたのか、安全柵の外側にいた、髪が風で踊っている。

「麻里、危ない。戻りなさい」

健介は近づいた。

「来ないで！ お父さん。これならすぐに終わるわ。ひとりぼっちでもないし、長くもない。あたしこれで良い！」

健介は語気の強さに思わず立ち止まった。しばらく睨み合ったまま時間が止まった。

「そつだね。麻里」葉子が静かに言った。

健介は振り向いた。葉子は泣いていた。

「確かに、これならすぐに終わるね。お母さんも麻里と飛ぶわ。一緒に飛ぼう」

麻里は驚いた。

葉子はゆっくりと歩いてきた。

健介も心を決めた。

「そつだ。父さんも飛ばう。みんなで飛ばう。これが一番良い」
健介も歩み寄ってきた。

麻里は柵にしがみついたまましゃがみ込んだ。涙をポロポロこぼしながら、

「なんでそんな事言うつよ。お父さんもお母さんも馬鹿じゃないの」

健介と葉子も柵を挟んで麻里の前にしゃがみ込み、柵を掴む麻里の両手をそれぞれひとつずつ、包み込むように握った。

「そつ、馬鹿だよ。だけど母さんの言ったことは名案だ」健介が言った。

葉子も言った。

「その通り、馬鹿なのよ。麻里。飛び降りようとする娘をひとりで見送る親なんていないのよ。みんな馬鹿になるのよ」

「お母さん…どうしてなの」麻里は泣きじゃくった。葉子の涙もさらに溢れた。

「好きだからよ。麻里のことが大好きで大切だからよ。だから一緒に飛ぶのよ。お母さん、麻里と一緒になら、全然怖くないわ」

「お父さんもだよ。麻里が大好きだから、一緒に飛ぶんだよ。いまそつち側に行くから、三人で『せーの』で飛ばう」

「お父さん…」麻里は泣きじゃくりながら鼻声で言った。「もついいよ、うちに帰る。ごめんなさい、ごめんなさい…」

健介が手を貸して、麻里の体を柵の内側に抱え戻した。

三人はしばらく抱き合っていた。風は相変わらずだが、麻里はちっとも寒くなかった。

4

健介は正式に手続きを取った。国連には麻里の『パシフィック』移住許可申請を、宇宙開発事業団にはシャトル搭乗の申請を、それぞれ行った。

一年近くの審査を経た結果、十三歳になった麻里は、シャトル『はるな』の、二〇六〇年八月打ち上げに搭乗することになった。幸いま

だ発症には到っていない。

それに向けて麻里は、宇宙開発事業団の鹿児島特殊訓練センターで、シャトル搭乗のためのトレーニングプログラムを三ヶ月間に渡り、受けた。

健介は長期休暇を取り、葉子とともに、鹿児島島のホテルに泊まり、いつも麻里の側についていた。もう一生会えないのだから、少しでも長い時間、麻里と接していたかった。麻里の旅立ちは、永遠の別れという悲しみでもあり、麻里の命が救われるという喜びでもあった。二人は、説明しがたい複雑な感情に支配されていた。

麻里は、もうすっかり落ち着いて、いまは黙々とトレーニングに励んでいた。運命がどうであれ、自分は自分の責任で自分の生き方を選んでいく。そう決めたのだ。麻里は少しずつ成長していた。

そしてトレーニングも終わり、いよいよ打ち上げの日が来た。三人は種子島シャトル発射センターに渡った。

センターに着くと、麻里は手を振って、軽やかな足取りで、搭乗員準備室に去っていった。麻里の表情に、迷いは全くなかった。

健介と葉子は、家族が見送ることの出来るセンターの搭乗員出発ゲートに立ち、麻里がやってくるのを待った。二人とも動悸が激しかった。本当に娘が宇宙に旅立つのだという実感が、ひしひしと押し寄せてきていた。他の家族たちもいたが、発射には慣れているようで、談笑しながら和んでいた。

見送り口の外には搭乗員の乗るバスが待機しており、その三キロ先に発射台があった。

青空の下、天を突き刺すようにそびえ立つ『はるな』の赤いボディが、太陽を反射して輝いていた。

『はるな』への燃料注入や貨物の搬入など、準備作業が着々と進んでいた。

『はるな』は、原子力エンジンを動力源としている。この原子力エンジンは、推進剤の液体ヘリウムを固体炉心原子炉の熱で気化して推進力を得る仕組みになっていた。

センター内のスピーカーから、発射台と管制室の間の交信音声が続いている。

「こちら発射台、燃料注入終わりました」

「管制室です、了解しました。これよりステージ4に入ります。エンジン、アイドリングを開始して下さい」

「こちら発射台、了解しました。アイドリングを開始します」

「管制室です、準備室サポートチーム、搭乗員の装備を最終確認して下さい」

「こちら準備室、了解しました。確認作業を開始します」

十分ほど経って、また音声が流れた。

「こちら準備室、搭乗員の装備、最終確認終わりました」

「こちら管制室、了解しました。これよりステージ5に入ります。搭乗員、出発ゲートに向かって下さい」

やがて、ブルーの船内服を来た搭乗員たちが準備室から歩いてきた。

『はるな』は八人乗りで、四人が操縦クルー、三人がNIISSでの実験に向かう科学者、そして民間人が麻里ひとりだった。

列の最後に麻里がいた。

出発ゲートの規制ロープの向こう側で見送る両親を見つけ、駆け寄ってきた。

「麻里…」葉子は、泣き崩れた。健介が葉子の体を抱えるようにして言った。

「麻里、元気でな」健介の眼も潤んでいた。

しかし、麻里は微笑んでいた。

「お母さん、そんなに悲しまないで。お父さんも。」

あだし、帰ってくるから」

その力強い言葉に、両親は戸惑った。どついう意味だろう。まだ、麻里は、自分の置かれている境遇を理解出来ていないのではないか。運命には逆らえないのだ。

しかし、麻里は繰り返し返した。

「わかった？ 泣く必要なんてないのよ。」

あだし、帰ってくるから。約束する。必ず帰ってくるから。

だから、お父さんもお母さんも、いつまでも元気で待っていて」

そしてきびすを返すと、他の搭乗員を追いかけて小走りでバスに乗り込んでいった。葉子は再び嗚咽をもらした。

バスは発射台に向けて発進した。

家族たちは、大型モニターがそなえられたベンチにがやがやと移動し始めた。健介たちも後に続いた。

モニターには、ここよりも近距離から撮影している発射台が映っており、赤いボディに白く記された「はるな」という文字がくっきりと見える。

「こちら発射台、搭乗員が到着しました。これより搭乗を開始します」
「こちら管制室、了解しました」

発射台横の可動式準備タワーでは、作業を終えたエンジニアたちが、搭乗員たちを出迎えた。

搭乗員たちは手を振り、エレベーターで7階まで上がった。そこでは、搭乗サポートチームの人々がいて、共にシャトルの出入口ハッチに連結されたホールウェイ（廊下）を渡り、搭乗員たちを手助けしながら垂直に立っているシートにひとりずつ座らせた。

麻里はシャトル内の八番シートに乗り、安全ベルトを締めた。仰向けになって息苦しかった。

麻里が乗ると、出入口ハッチが閉じ、ロックされた。

「こちら発射台、搭乗完了です。ハッチをロックしました」

「こちら管制室、了解しました。最終ステージに入ります。機長、エンジン状態の確認をしてください。整備チーム、全ケーブルを接続解除し、準備タワーの退避に入ってください」

発射台横で『はるな』に寄り添っていた準備タワーが、ゆっくりと移動して離れていった。

管制室からのアナウンスが『はるな』内に響く。

「推進剤冷却ポンプ圧力正常」

「原子炉出力四〇パーセント、五十パーセント…」

健介と葉子は、出発ゲートで、大型モニターに映し出される『はるな』の映像を、心配そうに見守っていた。

「八十パーセント、カウントダウン開始、一七、一六、一五…」

それは二人にとって、娘との別れを告げるカウントダウンでもあった。葉子の涙がまた溢れてきた。

『はるな』操縦席は、ガタガタと振動し始めた。

麻里はしっかりと前を見据えていた。片道切符では終わらせない。あたしはきつと帰る。

「十、九、八…」

送迎ポートでのモニターに映る『はるな』の映像が揺らいだ。噴射し始めたヘリウムガスで陽炎（かげろふ）が立っているのだ。

「六、五…」

『はるな』の振動は最高潮に達した。

「三、二、一、発射！」

麻里は、『はるな』が上昇し始めるのを感じた。

次第にスピードとGが増し、麻里の体がシートに沈み込んだ。さらにGは上がり、5Gを越えた。もう指先も動かせない。

血液の流れが偏り、意識が薄れそうだった。もしトレーニングプログラムを行っていなかったら、失神していたかもしれない。それくらい強力な加速度だった。

やがて締め付けるGが緩んできた。

前方の窓に広がっていた青空の色が、次第に濃くなり、緩やかに藍色になり、ついには黒くなった。星々が見えてきた。大気圏外だ。

激しかった振動が嘘のように消え、体も軽くなった。無重力状態だ。

「こちら管制室。進路は良好。二分後に衛星軌道に乗ります。エンジンを停止し、スラスターで姿勢を制御して下さい」

「了解」

スラスターとは、空気を噴射する装置で、『はるな』の機体の十ヶ所に取り付けられている。エンジンの音が止まり、機内が静かになった。

地上では、葉子と健介が、『はるな』が吸い込まれていった空を、じつと見つめていた。

実際にはもう何も見えないが、名残を惜しむ二人の眼には、残像がしっかりと見えていた。

「行ったわ…」

「ああ、行った。行ってしまった」

「これで良いのよね。良かったのよね」

「ああ、そうとも。これで麻里は生き続けられる」

「…麻里、どうして『帰る』なんて行ったのかしら」

「わからん」

心が静まるのを待って、二人は帰っていった。二人とも、胸の中が空洞になったように、うつろな気持ちになっていた。それを打ち消そうと、これで良かったのだ、これで良かったのだ、と心の中で繰り返し返していた。

5

NISSは、直径五十メートルの二つの円柱がクロスした形になっている。円柱の一つは長さ九百メートル、もう一つは長さ七百メートルあった。いわば宇宙に浮かぶ巨大な十字架だった。色々な箇所に太陽光発電パネルが取り付けられている。

『はるな』は第一ドッキング・ベイにボディを静かに寄せていった。ベイから巨大なアームが二つ出てきて、『はるな』を掴み、出入口ハッチをベイに密着させた。搭乗員たちはハッチを開けて、次々と漂いながら出ていった。NISSのベイ日本人係員が名簿をチェックして、次々と磁気ブーツを渡した。強く蹴ると磁気が切れるようになっていて、こ

れに履き替えると、無重力状態でも比較的楽に機内を歩き回ることが出来る。

最後に降りた麻里は、係員に名乗った。

「川内麻里です」

『『パシフィック』に移住する患者さんですね。いま国連の担当者を呼びますから待って下さい』

麻里は、磁気ブーツに履き替え、足を床に接地させて待った。宇宙ステーションはきつと薄暗い中で、科学者たちが黙々と実験をしているのだらうと思っていたが、実際のNISS機内は、思いの外ずっと明るかった。係員に尋ねると、上にも下にも照明があるせいで教えてくれた。無重力状態では上も下も関係なく、人によっては逆さまで作業をしている場合もある。どういふ姿勢でも充分な明るさになるように照明がたくさん装備されているのだった。

あたし、本当に宇宙に来たのね。麻里は、緊張で胸が高鳴っていた。やがて、国連のマークのついた制服を着た日本人が、壁の手すりに沿って、静かに飛んできた。右手に、レバーのついたバスケットボールほどの丸いものを持っている。左腕には同じものをもうひとつ抱えていた。

「こんにちは。山南栄一郎です」

麻里は戸惑った。おじさん、逆さま…。

「あ、失礼。磁気ブーツが嫌いなもので」山南は器用に体をくるりと回して、麻里と同じ向きに姿勢を直した。

「あの、川内麻里です」麻里はお辞儀をした。

「発射は大変だったでしょう。体は痛くありませんか」

「大丈夫です」

係員が貨物室から運び出した麻里のポストンバッグを持ってきた。

「わたしが持ちましょう」山南が受け取った。『『パシフィック』は第三ドッキング・ベイに連結されています。これを持って下さい』麻里に、丸いものをひとつ渡した。

「これはスラスター・ポッドと言って、機内の移動に使うものです。みんな短く『ポッド』と呼んでいますけどね。周りにびっしりと開いている穴は空気を吹き出すスラスターです。」

このレバーを掴んで、親指のAボタンを好きな方に倒すと、空気が噴射して、そちらに移動することができます。

人差し指のBボタンがブレーキで、どちらを向いて飛んでいても、押されたら逆噴射してその位置で静止するようになっていきます。Bボタンを押したままにすると、空中に固定したままでいられます。無理に動かそうとしても逆噴射して絶対動けないようになっていきます。

また、スピードを出していても、壁や障害物に近づきすぎると、自動的に速度が遅くなって、衝突しないようになっていきます。

それから、磁気ブーツと連動していて、Aボタンを押すと磁気ブーツの磁気が切れるようになっていきます」

麻里はポッドを受け取ると、Aボタンを押してみた、途端に磁気ブーツが床から外れ、ポッドに引つ張られた。

「きゃ」麻里は飛び始めた。

「川内さん、Bボタンです。人差し指！」山南が笑って声をかけた。

Bボタンを押すと、ポッドはガクンと止まり、空中にピン留めされたように、頑として動かなくなった。シューシューとあちこちのスラストから空気を吹き出して、位置を保っている。

山南が追いついてきて止まった。

「Aボタンは、もつと優しく操作しないといけませんよ。少し練習すれば慣れますよ。それとこれが機内無線電話です。麻里さんに必要になりそうな関係者の番号はもうインプットしてあります。』LIST』というボタンを押すと次々名前が出てきますから、目的の人を表示して『CALL』ボタンを押すと呼び出しを始めます。どうぞ」

麻里は山南から電話を受けとった。

「では第三ドッキング・ベイに案内します。ゆっくり行きますから、あわてないで付いてきて下さい」

山南がポストンバッグを左手に、ポッドで動き始めた。

麻里は、今度は慎重にポッドを操作して、後に従った。

通路の右側に、窓がずらりと並び、地球が見えた。きれい！ 麻里は、初めて生で見る青い地球に感激した。

やがて第三ドッキング・ベイが近づいてきた。

窓越しに、ドッキング・ベイに繋がった『パシフィック』の船体が見える。『パシフィック』は全長四百メートルで、円柱型をしている。船体の最後部の一部分はゆっくりと回転していた。

「あれが『パシフィック』ですか」

「そうですよ」

「大きいんですね」

「そうですよ」

「あのぐるぐる回っている部分は何ですか」

「重力区です。あの部分だけ遠心力で擬似的に重力を発生させているんですよ」

『パシフィック』の入り口では、白衣を着た若い日本人女性が待っていた。

「こんにちは山南さん」と女性が山南に声をかけた。

「江上さん、こちらが川内麻里さんです」

麻里はポッドを停止させると、磁気ブーツで床に立ち、お辞儀をした。

「あなたが川内さんね。ようこそ『パシフィック』へ。

わたしは江上美知留。内科医よ。あなたを担当するドクターです。データはもう岡本先生からもらっているわ。

ここでは日本人はとも少ないけど、当分はわたしが通訳をするから安心してね。そのうち麻里さんも英語を覚えるでしょう」

美知留は、山南からポストンバッグを受け取った。

「ではわたしはこれで」

「山南さん、ご苦労様でした」

山南は飛び去っていった。

「ポッドの扱いは慣れた？」美知留は麻里に言った。

「いえ、まだ、おっかなびっくりです」

「ゆっくり行くから、大丈夫よ」

二人は『パシフィック』内の回廊を並んで進んだ。途中、何人もの

白衣の人や、パジャマの人とすれ違い、改めてここが病院であることを感じさせた。

右側には窓が並び、地球が見えていた。左側にはずらりとドアが並んでいる。

『パシフィック』は大きく分けて、居住区、生活区、病院区、重力区があるの。

居住区は、わたしたちスタッフや入院を必要としない人が住む部屋があるのよ。

生活区は、文字通り、地上で送っていたような生活をするための区域よ。図書室、日用品配給所などがあるわ。娯楽室で映画を観たりすることも出来るのよ。

病院区は、診察や検査を受けたりする部屋や、病室があるところ。

重力区は、回転している部分で、食事をしたり、トレーニングをしたりするためのところ。

『パシフィック』ではいま、二百人のスタッフと四十二人の患者さんが暮らしているの。

あなたと同じGDOの人は六人いるわ。そのうち四人がもう発症していて、エアフロート室で過ごしているの」

「エアフロート室って何ですか」

「知っているとと思うけど、GDOの患者さんは、骨が極度に脆いの。だから、軽く壁に当たっても骨折してしまふ。」

それで、部屋の壁中にスラスターがついていて、体が壁に近づくとすぐに空気を吹き出して、はじき返すような病室があるの。それがエアフロート室よ。衝突する恐れがあるので窓はなく、小さなモニターで外部の人と話をするのよ」

まるで棺桶だ……。麻里は気持ちが暗くなった。あたしはそんなところには入りたくない。

「あたしはどこに居れば良いんですか」

「麻里さんはまだ発症していないから、居住区の普通の部屋に住んでもらうわ。ここよ」

二人は、「3333」と書かれた部屋の前で止まった。

ドア横のコントロールパネルのボタンを押すとドアが開いた。十二

畳ほどの広さの部屋で、浴室、トイレ、ベッドなど、それぞれ無重力仕様のものが備えられていた。

美知留は、麻里に各設備の使い方を説明した。

「まずは、ゆっくり体を休めて。食事の時にまた来るわね。」

『パシフィック』船内では『RA（規制区域）』という警告灯の点いている所以外は自由に移動して良いわよ」

そう言うと、美知留は出ていった。

麻里はベッドに横になった。磁気毛布を体にかけて、磁気ブーツと同じ原理で、磁気毛布がベッドに吸い付き、麻里の体をベッドに押しつけた。

とうとう『パシフィック』に来たのね。麻里はため息をついた。

見送りに来た両親の姿を思い浮かべた。お母さん、あんなに泣いて…。

『帰る』と約束したが、麻里は本気だった。治らない病気なんてない。きつくない。

誰かが治し方を見つけてくれるに違いない。ここは仮の宿。病気を治して、きつと帰ってみせる。

6

「ピピー」ドアのブザーが鳴った。

麻里はがばつと起き上がった。その勢いで、宙に浮いてしまった。いつの間にか眠っていたらしい。

「はい」インターホンに答えた。

「江上です。寝ていた？」江上美知留だった。

「あ、いえ、大丈夫です」ドアを開けた。

「お腹空いたでしょ。レストランに案内するわ」美知留は言った。

二人はポッドで、重力区に向かった。

「重力区の入口にはレギュレーターと言って、無重力から疑似重力にスムーズに移行するための小部屋があるの。あれよ」

回廊の突き当たりに、地球で見かけるエレベーターのようなドアがあった。

美知留がドア横のパネルのボタンを押すとドアが開いた。

「さあ、乗るわよ」

二人はレギュレーターに入った。

「ここでたまに酔う人がいるけど、麻里さんは大丈夫かな」

次第に体が沈み込むような感覚になり、重力を感じ始めた。やがて、しっかりと自分の体重を感じるようになったところで、反対側のドアが開いた。

とたんに賑やかな人の話し声に包まれた。ぐるりと湾曲した床の上に、テーブルが並べられ、四、五十人の人々が食事をしていた。

普通に歩ける。不思議な感じだ。

「食事は、病気の種類によって大まかに分けられているの。麻里さんはこという区分よ。高カルシウム食なの。トレイを取って、こと書かれたカウンターに並んでいるものから、好きなものを取って良いのよ」
麻里は美知留の後にしたがって、料理を取っていった。地球と同じようなありふれたものが並んでいた。

「普通なんですね。学校の給食みたいです。でも日本人が少ないのに、和食が結構ありますね」

「実はね、わたしはレストラン運営委員会の委員長なの。わたしの権限で和食メニューを充実させてるのよ。わたし和食じゃないと嫌なので」美知留はウィンクして見せた。麻里は笑った。

二人は席に着き、食べ始めた。

「麻里さん、わたしたちスタッフは、時々地球に帰っているけど、その時に問題になるのが筋力の低下なの。」

宇宙だと、常に全く力を抜いた状態で暮らしているため、どうしても筋肉が痩せ細っていくのよ。

だから、この重力区にあるジムで、毎日のようにトレーニングをしているの。

麻里さんも、まだGDOを発症していない、普通の人と同じ体なのだから、健康のためにトレーニングをしないとだめよ」

「はい」麻里は食べながら答えた。なるほど、確かに、NISSSに來てから、体が楽だ。楽すぎる。「これでは筋肉は落ちて行くに違いない。

あたしもいつか地球に帰るんだから、ジムに通おう。

ここは仮の宿だから。

7

翌日、麻里は、江上美知留の診察室に呼ばれた。

部屋に入ると、美知留の他に看護師がいた。美知留よりさらに若そうな日本人女性だ。

「麻里さん、あなたの担当ナースよ。作田登美子さん。作田さん、この人が川内麻里さん」

「川内です。よろしく願います」麻里は頭を下げた。

登美子も頭を下げた。

「まあ、一応、規則なので担当を決めたけど、麻里さんはまだ発症していないから、時々話し相手になってもらうくらいしかすることがないわね。

ただ、作田さんはGDOの患者さんのケアをずっとしているので、知識と経験は豊富よ。不安なことがあれば、何でも相談すれば良いわ」美知留は、「M・KAWAUCHI」とラベルされた真新しいファイルを開いた。カルテだろう。

麻里たち二人はそれぞれ紙を渡された。色々と書かれている。それでは、川内麻里さんの検査および生活スケジュールをお知らせします。

グリニッジ標準時で毎週月曜日の午前十時、この診察室にて血液検査と骨密度検査です。血液検査項目はGDOキャリア用標準メニューで、最初の表に記してある二百項目です。このメニューですと、分析ロボットの所要時間は四時間ですので、午後三時に同じくこの診察室にて結果説明。

火曜日から金曜日まで、宇宙開発事業団教育部門による通信授業を午前三時間と午後三時間です。自室のコンピュータ端末で受講して下さい。

夕食前一時間半は、重力区ジムにて、筋力トレーニングです。担当インストラクターはケイト・ジョーンズ。日本語は話せません。実演

してくれるので、それに従って下さい。英語のトレーニングも兼ねて。土曜日、日曜日は休日です。

なお、平日・休日に関わらず、下着の下に生体モニターを装着すること。これは『パシフィック』の規則です」

美知留はカルテを閉じた。

「何か質問は」

二人とも、何も言わなかった。

「では、何でも気軽に尋ねて、毎日を楽しく暮らして下さい。以上です」

8

「ハア、ハア……」

麻里は、ランニングマシンのスイッチを止めた。汗だくだ。ジムには毎日欠かさず通っていた。

きょうはもう充分よ。ケイトが英語で話しかけてきた。

「Pardon?」麻里は聞き返した。

『パシフィック』での生活も三ヶ月が過ぎ、麻里はすっかり新しい環境に慣れた。英語も、ゆっくり話してもらえば少しずつ聞き取れるようになってきた。

きょうはもう充分よ。ケイトはゆっくり言い直して、笑顔で親指を立てて見せた。

麻里も同じポーズを返して笑った。ケイトとも親しくなった。陽気なケイトは、いつも麻里に元気をくれる。

週に一度、江上美知留の診察室に行き、検査を受ける以外は、地球からの通信教育で中学校の授業を受ける毎日だった。

三日に一度は、日本の自宅にあるコンピュータを通じて、映像通信で両親と話していた。

「麻里、何か困っていることはない？」葉子は口癖のように麻里に問

いかけた。

「大丈夫。みんな親切だし」と答えるのが常だった。

最初のうちは、葉子がきまって泣いてしまうので、困ってしまった。しかし、ようやく葉子も現実を受け入れることが出来たのか、やがて冷静に話をできるように変わった。

ある日、休憩中の作田登美子に尋ねてみた。

「作田さん、GDOの患者さんって、いま何人くらいいるんですか」
登美子は少し考えて答えた。

「ここに七人…、確か、地球には…去年三人亡くなったから、十五人合わせて二十二人ね」

「地球にいるひとたちは、どうして『パシフィック』に來ないんですか」

「まず、十三歳になっていない子が三人。それと、十三歳で発症してしまつた子が二人。あとは宗教上の理由で延命を拒否している子が六人。政治的理由で国が出国を認めていない子が四人」

あたしは恵まれているんだ…。麻里は初めて知つた。

「治療法の研究はどこまで進んでいるんですか」

「最新のことは江上先生が詳しいと思うけど、おそらく今も五年前も変わりが無いと思うわ。つまり残念ながら進んでいないということよ。

麻里ちゃん、自分で資料を読んでもみるといいわ。英語の勉強にもなるし。

わたしがやり方を教えてあげる」

二人はポッドで麻里の部屋に行った。登美子は、コンピュータで文献の調べ方を教えてくれた。

麻里は、医学の基礎知識やGDOに関する資料を集めて、調べ始めた。まだ中学生の麻里には、難しいことばかりだったが、辞書と格闘し、何度も何度も読みかえし、少しずつ理解していった。

麻里の資料調べもだんだん巧みになってきた。ついでに英語の実力も付いてきて、ケイトと普通に話せるまで上達した。医学についても、GDOに関係する極々狭い分野に限るが、大学生に追いつくくらい、博識になっていた。

作田登美子の言葉は本当だった。この五年間、症例の報告はあるが、新しい治療法に関する報告はほとんどない。いや、そもそも、GDOに関する研究例があまりにも少ない。

麻里は、焦りを感じた。自分には時間はそれほどない。なぜ、科学者たちはもつと一生懸命研究してくれないのだろう。

麻里は、江上美知留に尋ねた。

「先生、どうしてGDOの資料はこんなに少ないんですか？ ガンやAIDSの資料は山のようにあるのに」

美知留は言葉に詰まった。言いくそくに教えてくれた。

「実はね、GDOを研究する科学者はとても少ないのよ。

たとえばAIDSの新薬を開発したら、世界中から注目されるわ。何百万人の人がそれによって救われるもの。

でもGDOは一億人にひとりの病気でしょう？ 治療法を見つけても、誰も興味を持ってくれないのよ。

つまり、やり甲斐がない研究テーマなの。

中には、真剣に取り組みたいと思っている人も、いることはいるわ。でもね、研究というのはとてもお金がかかるのよ。

国や企業は、同じお金を払うなら、GDOよりAIDSの方にたくさんお金をくれるのよ。ひとの命をお金で比べたりしてはいけないかも知れないけど、現実問題、払う価値があるのは患者の数から言っても、圧倒的に、GDOよりAIDSよ。だから、GDOを研究したいと思っても、研究費がもらえないのよ。

注目もされない、お金ももらえない。だからGDOの研究者は少な

いのち」

美知留の説明は、実に分かりやすかった。そして、その分、麻里にはシヨッキングだった。現実の厳しさを思い知らされた。

あたしは帰るんだ。約束したんだ。ここは仮の宿。きつと帰るんだ。誰も研究してくれないのなら、自分で考えるしかない。

何とかやってみよう。自分で突き止めてみよう。そして、両親のもとへ帰るのだ。

専門家が匙をを投げた問題に、ひとりの中学生が取り組む 麻里は、途方もない道へ歩み出していた。

10

「ここ座って良い？」

麻里がレストランで昼食を取っていると、黒人と白人の男の子が英語で話しかけてきた。『パシフィック』の暮らしも六ヶ月を過ぎ、すっかり英語が上手くなった麻里は、

「いいわよ」と微笑んだ。

「ぼくはアンソニー・マッコイ」と黒人の少年。

「ジミー・パーカー」と白人の少年。

「マリ・カワウチよ」麻里はそれぞれと握手した。

「ぼくらもGDOなんだ」アンソニーが言った。

「そうなの？ 江上美知留先生から他に二人キャリアがいるって聞いてたけど、あなたたちだったんだ。

ごめんね、何度かここで見かけて、ああ、あたしと同じくらいの歳の人たちだな、って思ってたんだけど、英語がまだ自信なくて、話しかけられなかったのよ」

麻里はGDOキャリアと聞いて嬉しくなった。同じ苦しみを持つ者同士の、連帯感のようなものを感じた。

「アンソニー、マリにも、あれ、見せてあげたら」ジミーがアンソニー

に言った。

「え、なにになに？」

アンソニーはポケットを探った。

「きれいだよ」

アンソニーが手にしたものは、細かな細工を施された、金のネックレスだった。

「うわ、きれい！」

「いや、ぼくの父は、純金細工の職人なんだ。母にプロポーズする時に、手作りのこのネックレスをプレゼントしたんだってさ。うっとりしている母に『結婚してくれる？』って父が言ったら、母は上の空で『いいわよ』って空返事をしたんだって。

母はいつも、父は策士だったって言うし、父は、母は金に眼がくらんだって、お互い悪口を言い合ってたよ。

ぼくが『パシフィック』に来る時に、母がこれくれたんだ。結婚してから片時も外したことのないこのネックレスをね」

「素敵な話ね」麻里は微笑んだ。

「ところで…」とジミーが言った。「ぼくは十四歳で、アンソニーは十五歳なんだ。マリは十三歳だったね」

「そつよ」

ジミーは、アンソニーと顔を見合わせて、互いに表情を曇らせた。

「マリ、怖くない？」

二人の顔を見て、麻里はすぐにピンと来た。

「発症？」

「そつ。アンソニーは、もうポーターを超えたから、辛くて気が狂いそうだって。ぼくら二人とも、睡眠薬を飲まないで夜眠れないんだよ」

「あたしは考えないようにしてる。考えると怖くなるから。ポーターって言うっても、あたしと同じ歳で発症してるひと何人もいたのよ。みんな、いつ来てもおかしくないわ」

アンソニーが言った。

「ぼくだって考えたくないさ。だけど、毎日、頭の中がそればかりなんだよ」

麻里は、しばらく二人と会話を交わした。二人とも、怯えきつてい

た。

GDOを持って生まれた不運はそれぞれの考え方で受け入れているようだが、それでもやはり、恐怖からは逃れられないのだ。

また会おうと言って、三人は席を立った。

麻里は部屋に戻ると、力を抜いて宙を漂った。GDOを持つ人たちに初めて会った。そのことで、改めて自分も怖くなった。

いつ爆発するか分からない時限爆弾。あたしたち、それをひとつずつ体の中に持つてるんだ…。

麻里は唇を噛んだ。ここは仮の宿。あたしは帰るんだ。約束したから。

あたしは運命に屈したりしない。

麻里は天井を軽く蹴って、コンピュータの前に舞い降りた。帰ってみせるわ。そう心の中で呟いて、資料を再び調べ始めた。

1 1

月曜の定期検査の日、発症していないことを知らされて、またほっ

とした麻里は、江上美知留に、

「先生、ちょっと話せますか」と尋ねた。

「いいわよ。何」

「あたし考えたんです。GDOを発症すると、なぜか活性型ビタミンD₃が生産されなくなって、カルシウムが食事から補給出来なくなり、その事で副甲状腺ホルモンの勢力が増して、骨が分解されるんですよ」

「よく勉強してるわね。そうよ」

「つまり副甲状腺は、血液のカルシウム濃度をいつも見張っていて、少ないな、と思ったら副甲状腺ホルモンを一杯出すんですよ」

「そうね」

「じゃあ、毎日カルシウムを注射すれば良いんじゃないですか」

美知留は答えた。

「無理ね。活性型ビタミンD₃が無いのだから、代謝できずにどんどん

ん体外に捨てられるわ。追いつかない。それに、捨てられなかった分は全身の血管へばり付いて、血管を固く脆くしてしまうわ」

「そつか…。浅はかですね、あたし」

美知留は微笑んだ。

「いいえ、考えることは良い事よ。お互いもつと勉強しましょうね」

麻里は、自室でまた考え込んだ。

副甲状腺は血液のカルシウム濃度を監視している。そしてカルシウムが不足すると知ったら、副甲状腺ホルモンをたくさん出して、骨を分解する。

それなら、副甲状腺を騙すことは出来ないだろうか。

コンピュータの中の資料を調べ直し始めた。

* * *

半月ほど経って、麻里は再び、美知留に尋ねた。

「先生、副甲状腺を通る血管の上流側にカテーテル（血管に薬剤を流すための細い管）を入れて、カルシウムを二十四時間流し続けたらどうですか。血管へばり付かず、でも副甲状腺を騙せるくらいの、『いい感じ』の濃さで流すんです」

「うーん。口で言うのは簡単だけど、人間の体は、そう簡単にはいかないのよ。その『いい感じ』の濃さって、毎日のように変わるのよ。そしてそれは調べることができない。

必ず、血管へばり付く量になるか、副甲状腺が騙されない量になるか、どっちかに転ぶわ。

それに、一カ所から集中的にカルシウムを流し続けたりしたら、血管のその部分はすぐに石灰化して役に立たなくなってしまう、体は迂回路を作るでしょうね」

「そうですね…」

麻里は徹夜をすることが多くなった。自分は帰れる。ここは仮の宿。そう信じて頑張ってきたが、時間ばかりどんどん過ぎて、一向に出口の見える気配がない。

あたしには時間がない…。もう何度同じ資料を読んだことだろう。医学書も、甲状腺の項など、空で言えるくらいだ。

ある日、美知留は、時間になっても麻里が検査を受けに来ないため、電話をした。しかし、何度コールしても応答が無い。応急バッグを手にしてポッドで部屋に駆けつけてみた。ブザーを鳴らしても返事がない。しかし、船内モニターで調べると、麻里は確かに自室にいる。やむを得ず、美知留はコントロールパネルにマスター番号を入力して、強制的にドアを開けた。

資料だろう。部屋中に、無数の紙が浮いていた。麻里は 天井に磁気ブーツの右足だけが吸い付き、大の字で寝ていた。

「麻里さん」
起きない。

血圧を測った。明らかに低い。

美知留は、麻里を病院区の病室に連れて行き、栄養剤を加圧点滴した。

麻里は目覚めるとびっくりした。

病室に入れられて、ベッドに磁気毛布で寝かされている。

生体モニターから美知留に、目覚めたことを知らせる連絡が行き、美知留がやってきた。

「麻里さん、寝ている間に血流測定をしたわ。あなた、食事もうくに取らずに、徹夜を重ねたでしょう。」

脳内血流量が、通常の六割まで落ちていたわ。別の病気になるわよ」「先生、あたしには時間がないんです。GDOを解明しなくては」麻里は弱々しい声で言った。

「体力が回復するまで勉強は禁止よ」

「先生！」

麻里の声が、あまりにかすれて悲痛だったので、美知留は少し可哀想になった。

「しょうがないわね。考えたことを話してごらんさい。気が済むまで」

「ありがとうございます。」

GDOは発症すると活性型ビタミンD₃が激減しますよね。そのせいで、十二指腸からカルシウムを吸収できなくなるんですよね」

「そうね」

「活性型ビタミンD₃は、食物から取ったビタミンDが、色々形を変えて、途中肝臓を通り、最終的に腎臓で生み出されるものですよね」

「そうよ」

「だから、GDOの遺伝子欠損のせいで、肝臓と腎臓がおかしくなつてちゃんと働いていない、よって活性型ビタミンD₃を作れないと考えられているんですよね」

「そうね。それが今のところGDOの仮説となってるわ」

「でも、GDOを発症した患者に、健康な肝臓と腎臓を移植するという治療が、一時期、試されたんですよね。なのに活性型ビタミンD₃は増えないんです」

「そこがこの病気の一癖の謎なのよ。元の提供者の体では、しっかり活性型ビタミンD₃を生産していたのに、その肝臓と腎臓をGDO患者に移植した途端、生産しなくなるのよ。おかしい話よね」

「あたしも、そこで壁にぶちあたって、先に進めないんです。どうしてなのでしょう」

「わからないわ。GDO患者は、体内に収められた途端、肝臓と腎臓を弱らせる特別な毒を分泌してるのかもね。でも、そんなものは今まで発見されていないし、移植後の肝機能と腎機能は正常なのよ」

「先生にもわからないんですか…」

「あたし、こんなことも考えたんです。」

活性型ビタミンD₃が激減するのなら、外から活性型ビタミンD₃をじゃんじゃん注射すれば良いんじゃないかな、って」

「それも、昔、試みられてるわ。でも不思議なのは、どんどん入れて

いるのに、一向に体内の活性型ビタミンD3は増えないのよ」「
麻里はため息をついて、眼を閉じた。
「ああ、あたしもうダメ。頭がぼーっとしてます」
「栄養失調よ。これで気が済んだでしょう。」
とりあえず、三日ほど入院よ。勉強はお預け。良いわね」
美知留は麻里に睡眠薬を与え、病室から出て行った。
すぐに、麻里は深い眠りに落ちた。

12

あと一日で退院という日に、アンソニーとジミーが見舞いに来た。
「アンソニー、ジミー、久しぶり！　ありがとう」
「勉強しすぎて倒れたんだって？　マリはすごいな」ジミーが笑った。
「間抜けなのよ。あたし、右足一本で天井からぶら下がってたんだって」麻里はも笑った。
「マリの元気そうな様子を見て、安心したよ」アンソニーも笑顔を見せた。笑いながら、「マリ、これを持っていてくれないか」と例の純金のネックレスを取り出した。
「どうして。大切なものじゃない？」
「いや、中々会えなくなるから、ぼくのことを忘れてたりしないように、これを見て思いだして欲しいんだ。
ぼく発症したんだよ。再来週からエアフロート室だ。どうやら進行がかなり早いらしく、普通より早くエアフロート室に入らなきゃならないんだ」
「…！」麻里は真顔になった。
だが、アンソニーは吹っ切れたような清々しい表情だった。
「既に決まっていたことが起こっただけだよ。生まれた時からの運命なんだ。仕方がない。
ぼくの自慢は世界一の父と母だ。

これを見せた時に話した二人の物語を、もし機会があれば、後から来るGDOキャリアに見せて、話して欲しいんだ。ぼくの大切な父と

母のことを、色々なひとに知って欲しいんだ」

「そんな…」麻里は困惑した。

「頼むよ」アンソニーはネックレスを麻里の手に握らせて、両手で掴んだ。

「父たちのことを、他の人に知ってもらえると思うと、心おきなく工アフロート室に入れる」

麻里は、しばらく考え、アンソニーがそれで気が休まるなら、と思い、ネックレスを受け取った

「あたし大切にするよ」

麻里は、二人が出ていった後、手の中のネックレスを見つめながら、少し涙ぐんだ。

こうやって、ひとり、ふたりと発症していくんだ…。あたしの番はいつ来るんだろう。

13

退院した麻里は、また資料の洗い直しに取りかかった。どこかにヒントがないものか。

今も、まめに両親と映像通信をしていた。

両親の前では笑顔の仮面をかぶり、明るく振る舞った。

「元気そうね」母の葉子は笑顔を見せてくれた。

地球に飛び降りて、会いに行きたい。麻里は思った。甘えたい自分がある。だが、甘えることは、母を辛くさせることになる。麻里は余計な言葉は呑み込んだ。

麻里は、検査の日に江上美知留に言った。

「先生、『パシフィック』には五人のGDO発症をした患者さんがいますよね」

「お願いがあるんです。その方たちの、検査結果の経過を見せてもらえないでしょうか」

美知留は戸惑った。非常にデリケートな個人情報だ。第三者に公開することは禁じられている。

「これまでのGDOの研究報告では検査結果はせいぜい二十項目程度で、『パシフィック』のように二百項目もの検査結果はありません。

これがあれば、壁を突破できるかもしれないんです。何とか、見せていただけませんか」

美知留は思った。麻里との付き合いも、気がつけばずいぶん長くなった。

麻里は信頼出来る少女だ。

美知留は言った。

「特例として認めるわ。ただしコンピュータに入力するのは認められない。印刷したりリストを渡すから、その形で利用してくれる。また、GDOの研究以外には絶対使わないと誓える？」

「もちろんです。誓います」麻里は真剣だった。

美知留は、分厚いファイルを三冊、麻里に渡した。

麻里は部屋に戻ると、もらったデータシートを一枚ずつ、壁に磁石で留めていった。麻里の部屋の壁と天井は、資料で埋め尽くされた。

それから毎日、壁とにらめっこをして過ごした。

手がかり…、手がかり…、どこかにあるはずよ、それは眠っているだけ。いつか見つかるはず。

ここは仮の宿。あたしは帰る。約束したから。

運命には負けない。

14

麻里は十四歳の誕生日を迎えた。江上美知留、作田登美子、ケイト、ジミーが、麻里の部屋で、ささやかな誕生パーティーを開いてくれた。映像通信をしたら、日本でも、両親が部屋を飾り付け、パーティーを行ってくれた。

お父さん、お母さん、ありがとうございます。
あだし、きつと帰るから。約束したもの。

* * *

いつものように、江上美知留の診察室に呼ばれて行った。
きまつて笑顔で迎えてくれる彼女が、きょうは、しかめ面をしてい
る。

麻里は、胸騒ぎがした。

「麻里さん、いらつしゃい。ここにかけて」

麻里は黙って従った。

美知留は、麻里の瞳をまっすぐに見つめて、下唇を噛んだ。
少し沈黙していたが、思い切ったように口を開いた。

「発症したわ」

麻里は息を呑んだ。覚悟していたとはいえ、衝撃だった。

「三週間前から少しずつ活性型ビタミンD₃が減っていたんだけど、わ
ずかだったので、持ち直すだろうと思っていたのよ。」

「だけど、先週のデータでは、五分の一に激減している。もちろん、
きょうも血液検査をするけど、わたしの経験では、多分これはGDO
の発症よ」

「先生、骨密度は？」

「まだこの段階では、すぐに骨に異常は現れないわ。発症を確認して
からひと月ほど遅れて、骨の脆弱化が始まるはずよ。」

「半年前から磁気ブーツの禁止。一年後に、エアフロート室へ移動と
いうことになるわ。」

「ごめんね。わたしも悔しいわ……」

美知留が、麻里の膝に置いた手を取った。麻里も握り返した。麻里は
逃げ腰になる気持ちを奮い立たせて、ひと言ずつ押し出すように言っ
た。

「エアフロート室に入ったら、もう調査と研究はできなくなります。
あだし、GDOなんかには負けないってずっと頑張ってきたんです。
お父さんとお母さんに、帰るって約束したんです。二人とも信じて

ないかも知れないけど、あたしは本気です。
まだあきらめません」
「そつね、戦ってみましょう。わたしも全力を尽くすわ」
麻里は美知留に力強く頷いた。

15

ジミーが部屋に尋ねてきた。表情が暗い。

「聞いたよ」

「うん、発症したわ」

「マリが先に行くとは思わなかったよ」ぼそつとジミーが呟いた。

麻里は、ジミーに言った。

「あたしね、あきらめてないのよ」

壁や天井中を覆い尽くしているデータシートを指さした。

「ここにはね、まだ世界の誰も手にしたことのない貴重なデータがあるの。」

数年間にわたる、五人のGDO発症患者の、二百項目もの検査結果よ。

『パシフィック』でしか手に入らない、充実していて、そして膨大なデータよ。

あたし戦つわ。そして武器はこのデータよ。

ジミー、待っていて。あたし、自分も助かって、みんなも救ってみせる。

運命だった、って自分に言い聞かせるのは絶対いやなの」

ジミーは、驚いた。

この小さな麻里の、どこにそんなパワーが潜んでいるのだろう。

* * *

麻里は、発症したことを両親には告げなかった。平静を装って、努めて元気なふりをして、映像通信で両親と交信していた。

あたしはG D Oには負けたくない。絶対負けたくない。麻里は、弱音を吐きそうになる心の中で、そう繰り返して、自分を支えていた。

何度も何度も、壁に並べた検査結果を睨み、資料を読み直し、最後はそのままコンピュータの前で眠ってしまう日が続いた。しかし、あたしには時間がない。鋼鉄の棺桶、エアフロート室が待っている。

ある晩、懐かしい夢を見た。

日本の自分の家から近い、下町の縁日で、両親と屋台を眺めながら、ゆっくり歩いていた。まだ小さい麻里だ。父の健介は、大きな温かい手で、麻里の手を握ってくれていた。

通りは多くの人であふれていて、にぎやかだった。どこからか、安物のスピーカーのかすれた音で、童謡が聞こえてくる。

お面、風車、たこ焼き、綿飴、べっこう飴、オモチャ…色とりどりの屋台が並ぶ様子を、ただ見ているだけでも胸がときめいた。

麻里の好物の団子が売られているのを見て、母の葉子にせがんだ。串に四つ、白と薄紅の二色の団子が交互に刺されている。軽く炭火で焙って、そこに、甘い、甘い、糖蜜をかけて、麻里は食べ始める。まず、白を頬張る。団子の優しい歯ごたえと糖蜜の甘さが、麻里をうつとりさせる。

呑み込んで、次は薄紅だ。口の中に広がるたおやかな味。そしてまた白…、最後に再び薄紅…。

「美味しい！」葉子を見上げて笑った。葉子は、あらあら、と言いなから、麻里の口の縁についた糖蜜をハンカチで拭ってくれた…。

麻里は、おかわりをせがむ。今度は「ジャンボ」というのが欲しいと。葉子は買ってくれた。

ジャンボは、長い串に団子の数が八个だ。

麻里は横から食らいついた。まず、白を。そして薄紅を。また白を。

また薄紅を…。

ハツと眼を開いた。『パシフィック』の自分の部屋だった。かろうじて磁気ブーツで足は固定されているものの、体が無重力で直立してぶらぶらとなびいている。

「夢か…」麻里はがっかりした。

お団子食べたいな。そんなものはさすがに『パシフィック』のレストランには置いていない。

夢が続けば、もう一本食べられたのに。

それにしても何か気になった。

何が気になるんだろう。団子…。

「あっ、そうか。食べてるんだ」

* * *

「先生！」ポッドを乱暴に操作しながら、江上美知留の診察室に麻里が飛び込んできた。

「GDOを発症して活性型ビタミンD₃が激減するのは、『生産されない』からではなく、誰かが『食べている』からだ、って考えられませんか」

「うーん。『食べている』か…。

なるほど、そういう考え方も出来るわね。たとえば、活性型ビタミンD₃だけを分解する特別な酵素とか」

「それは。酵素って化学物質を食べちゃうんでしょっ？」

「そうよ」

「遺伝子欠損のせいで、本来、体にはいないはずの特別な酵素が出来る、それが次々と活性型ビタミンD₃を食べているっていう風に考えてみたらどうですか」

「おかしくはないわ。可能性は充分あるわね。それなら、活性型ビタミンD₃を外から大量に投与しても一向に増えない謎の説明がつく。

酵素を特定するのは、とてもややこしい作業なので、始めから見当

をつけて探つていかないと見つからないものよ。だから、これまで、誰もトライしていないかもしれないわね」

だが、美知留はの眼が悲しげになった。

「でもね、麻里さん、がっかりさせたくはないけど、たとえそれが原因だとしても、体から酵素を排除することなんて出来ないのよ。次々と自動的に生産されるのだから」

「え、そういうものなんですか」

「そつち」

麻里の中のさつきまで膨らんでいた新たな期待が、たちまちしぼんでしまった。

「やっぱり、そんな簡単に行くわけ無いんですよ…」

「でも、進歩じゃない。今までとは違う可能性を見つけ出したんだから、酵素が見つければ、何か新しい展開になるかもしれないわ。わたしは調べてみるわ」

* * *

美知留は、NISSのアメリカ生化学研究チームに協力を依頼した。

たいていの酵素は、臓器内の細胞が新陳代謝で生まれ変わる際に、血液中にあふれ出してくる。それをうまく取り出せれば良い。

「そちらのチームがお持ちの『ユージーン』を使わせてもらえませんか」美知留は、チームリーダーのスコティ・タイラーに電話をかけた。

『ユージーン』は、生化学研究チームが持つ自慢の超高速生体分析ロボットで、血液サンプルを注入すると、DNA、RNA、ウイルスなどを分別抽出し、さらに、それらに特定の化学物質などを反応させた時の活性の強弱などを数千万点にわたり一網打尽に調べ尽くすことができるマシンだ。さらに、抽出した全物質の遺伝子配列解析や光学活性などを一時間ほどで済ませてしまつ。

タイラーは、いい顔をしなかった。

「難しいです。こちらはプロジェクトが大幅に遅れていて、何とか地球帰還日に間に合わせるために『ユージーン』を二十四時間態勢でフ

ル稼働させているのです」

「そこを何とかお願い出来ないでしょうか」美知留は粘った。「人の命がかかっているんです」

「そうですね…。では、一度だけ、つまり一サンプルだけなら協力しましょう。明日の午後二時でどうですか」

「ありがとうございます!」

美知留はN.I.S.S.の生化学研究チームを訪ねた。『ユージーン』のオペレータに麻里の血液サンプルと、活性型ビタミンD₃含有オイルサンプルを渡した。

『ユージーン』は、その機能の割には、思ったよりずいぶん小さかった。右端にコンピュータ端末の付いた、冷蔵庫三個分くらいの四角いメタリックの筐体で、端末横のオペレーティング・パネルに小さなサンプル注入口が四つ備えられ、自動ピペット（精密なスポイト）をセットするようになっている。

血液と活性型ビタミンD₃サンプルを自動ピペットに吸い上げ、注入口にセットしたら、あとはコンピュータにいくつかの条件を入力すると解析がスタートする。

一時間後、すべての測定結果を収めたディスクを渡された。

「ありがとうございます」美知留は礼を言うと、『パシフィック』に戻った。

自分の診察室で、ディスクの中身を調べ始めた。膨大な数のファイル…。

「…いた。これね!」

そこには、活性型ビタミンD₃だけを分解する酵素の記録が確かに入っていた。

長い間、謎といわれていたG.D.O.のメカニズムが分かり始めた瞬間だった。

美知留は麻里に電話をかけた。

「麻里さん、やはり酵素の作業だったわ。見つかったわよ」
麻里はポッドでやって来たが、元気がなさそうだった。原因が分かってても、病気が治らないのなら麻里にとって何の意味もないのだ。

17

再び、壁にぶち当たった麻里は、しばらく考えるのをやめることにした。

甘いものが無性に食べたくなった。

レストランに行き、スタッフに、

「このレストランで一番甘いものは何ですか」と尋ねたら、

「アップルタルトだね。シェフのノーマンさんが、故郷のニューヨーク仕込みのタルトを焼いてくれるよ」

「タルトかあ……」

そっち系も好きだけど、いま食べたいのとは方向性が違うのよね。

担当看護師の作田登美子に尋ねてみた。

「甘いもの食べたくありませんか」

笑われた。

「そりゃ、なるわよ。でも、『パシフィック』ではあまり種類がなくてね……」

「あたし、和菓子系が食べたいんです」

登美子も眼を見開いて指さした。

「そう！ 和菓子系！ わたし、中でもようかんが大好きなの。一回に一本丸ごと食べちゃうのよ。あーん、麻里ちゃん、思い出させないでよ。恋しくなるじゃない」

麻里も笑った。

「NISSには日本人のかたって何人くらいいるんですか」

「三十人くらいじゃないかな」

「甘党のひとはどうしてるんでしょうね」

「NIISSのスタッフはわりと地上と行ったり来たりしているから、自分で持ってきてるんじゃない」

「ああ、分けて欲しいな」

登美子は、にやっと笑った。

「聞いてみようか」

「ほんとですか」

「ええ。自分のため、となると恥ずかしくて聞けないけど、担当患者さんが食べたがってる、といえば堂々と聞けるわ」

登美子は電話を取り出すと、知り合いのNIISSの日本人にかけた。

しばらく話をして、切った。

「格好のひとがいるみたい。和菓子を持参してきてる女性のかた。ああ、何をもってるのかしら」

番号を入力して電話をかけた。咳払いをして声を低くすると、深刻そうに、

「『パシフィック』で看護師をしております作田と申します。

和菓子をお持ちとうかがってお電話したのですが、実は、わたしの担当患者さんに重症の日本人少女がいて、窓外の地球を見ながら、うわごとのように、もう一度和菓子が食べたい、和菓子が食べたいと言って、しまいには泣いてしまっんです。見えて可哀想で…。

誠に勝手なお願いとは思いますが、少し分けていただけないでしょうか」

麻里は笑いをこらえた。作田さん上手いわ。まあ、確かに重症だからこんなところにいることは間違いないんだけど。

登美子は、悲しげな声で、少し話をして、

「…そうですね。ありがとうございます。どちらに言えばよろしいでしょうか。D区画七番ユニット？ はい。では参ります。はい、はい、恐れ入ります。彼女も喜ぶと思います」

電話を切った。途端に、麻里は笑い転げた。

「作田さん、ペテン師みたいですね」

「あら、人聞きが悪いわね。そんなこと言っていると、もらっても分けてあげないわよ。

何を持ってるのかしらね。下船許可をもらって、行ってくるわ。人

に見られるとやっかいだから、麻里ちゃんの部屋で食べましょう。部屋で待ってて」

そう言つと、登美子はポッドで飛ばして去っていった。

三十分ほどで、登美子が部屋にやってきた。ガラス容器を抱えている。

部屋にはいると蓋を開けた。

「じゃーん。たくさんゲットしてきたわ。箸も持ってきたわよ」

中のお菓子が、ゆつたりと漂いながら、容器から出てきた。

「あ、ようかん！」登美子は箸で、逃げようとするようかんを挟んだ。

麻里も叫んだ。

「お団子！」白いみたらし串団子がさまよっているので、指でつまんだ。

二人とも

「ああ、美味しいい」と嬌声を上げた。

* * *

二人だけの秘密のパーティーはあつという間に終わってしまった。

登美子は「ありがとう。おかげで生き返った気分よ」と言つて、仕事に戻つていった。

夜になつても、麻里は、団子の味の余韻を楽しんでいた。美味しかった。

ベッドに寝て、磁気毛布をかけた。もっと進行したら、この磁気毛布も使えなくなるのね。

悲しくなってきた。

「また、お団子の夢見ないかな」

この間の夢をまた思い出した。眼を閉じた。

「お団子で自分を酵素に当てはめたのは、ヒットだったんだけどなあ……」

やはり素人考えでは、この難病を解決するのは無理なのかも知れない。

「だけど、帰りたい。約束を守りたい。」

日本で、再び屋台のお団子を食べたい。

白と薄紅が交互に刺さった串団子を、炭火で軽く焙って、糖蜜をかけて…。

それをあたしは頬張る。

まず、白を頬張り。そして薄紅を口にする。また白を。また薄紅を…。

「ん？」

また何かが気になった。眉をひそめた。

あたしは酵素なんだ。そして団子を食べる。まず、白を。そして薄紅を。また白を。また薄紅を…。

何かが気になる。あたしは団子を食べる。まず、白を。そして薄紅を。また白を。また薄紅を…。

しばらくぶりに、またGDOのことを考え始めた。

何が気になるの。

まず、白を。そして薄紅を。また白を。また薄紅を…。

「もしかして…」

毛布をはぐり、軽くベッドを蹴って壁に近寄り、貼ってあるGDO発症患者の検査結果データを見た。

活性型ビタミンD₃がほとんど無く、すっかりGDOが進行してしまっている。

他の項目を指でなぞって行った。

今まで、二百項目もの検査結果は、でたらめな数字の集まりにしか見えなかった。武器になることは確かだが、量が多すぎて、どこから整理すれば良いのか途方に暮れていたところだった。

「これかしら」

そこにペンで印を付けた。

隣の別の患者のデータも見てみた。指でなぞる。

「同じだ」印を付けた。

「これも！」

「これも！」小さな発見をした。

麻里は興奮し始めた。

ここは仮の宿。あたしは帰る。約束を守るんだ。

電話を取りだして、キーを叩いた。

「先生、江上先生！」

* * *

十五分後、麻里は江上美知留の診察室にいた。自室から駆けつけた美知留は、パジャマの上に白衣を着ていた。

麻里は、他のGDO発症患者の検査結果を壁に磁石で留めていく。

「先生は、この間、酵素は体から排除出来ないって言いましたよね」

「そつよ」

麻里は眼を輝かせた。

「排除しなくてもいいんです。先生、お団子好きですか？」

「お団子？ 何の話。最後に地球に帰還してから、もう長いこと食べてないわ。わたしも好きよ」

きょう食べたことは伏せておこつ。

「あたし夢を見たんです。ジャンボって言って、紅白のお団子が八個串に交互に刺さっていて、それをひとつずつ食べていくんです」

「ごめんなさい。話がまるで分からないわ」美知留は困惑した。

「この間言ったように、あたしが、その酵素っていうやつなんです。お団子の白が活性型ビタミンD₃、そして赤が別な物質なんです。酵素のあたしは、赤も白も好きなんです。だけど順番に食べていくしかない。もし、串に赤ばかり刺さっていたら、白は中々食べられない。そつですよね？」

「そつね」

麻里は壁に貼った検査結果の紙に、次々と赤いペンで印をつけていった。

「見て下さい。GDOを発症した人は、活性型ビタミンD₃が減っているのもちろんですが、同時に、必ずビタミンKも減っているんです。つまり、赤いお団子はビタミンKなんです。両方とも好物なんです。だから、串に、ビタミンKばかり刺さっていたら、活性型ビタミン

ンD3は食べられませんよね」

美知留の眼が光った。鋭く印を追って行った。胸が高鳴った。美知留は言った。

「ビタミンKを大量に摂取すれば、この酵素はビタミンKの分解に忙しくて、活性型ビタミンD3を分解出来なくなる。

そうすれば、活性型ビタミンD3の量は増えて、カルシウムを元通りに吸収・代謝できるようになるわ。

普通、関係あるとは思わないから、ビタミンKまでモニターしているのは、『パシフィック』くらいなのよ。

だから、誰も気づかなかったんだわ」

美知留は、麻里の両肩を手で力強く押さえた。

「麻里さん、これが事実なら、あなたすごいわ!!」

18

江上美知留は、渋るNISSのスコティ・タイラーに頼み込んで、もう一度だけ、『ユーージン』を使わせてもらった。その結果、前回発見した活性型ビタミンD3を分解する酵素が、ビタミンKも特異的に分解するという結果が出た。麻里の発見が、真実味を帯びてきた。

数日後、診察室で、江上美知留は麻里と作田登美子を前にして言った。

「これからビタミンK製剤の投与を、一ヶ月間に渡ってテストします。毎日朝、食後に、この顆粒を二パック、飲んでください。これはビタミンKにして〇・三ミリグラムに相当します。一日に必要な量のおよそ五五〇倍になりますが、ビタミンKについては、過剰摂取にもなう副作用は報告されていませんので、安心してください。作田さん、投薬管理をよろしく願います」

「はい」「登美子と麻里は答えた。」

麻里は緊張した日々を送っていた。もうしばらくで、発症してからひと月になる。美知留によれば、骨の脆弱化が始まるという。GDOの患者もまちまちで、アンソニーのように発症から急速に病状が進行するひともいれば、三ヶ月過ぎても骨が健全なひともいる。自分はこちらのタイプなんだろう。不安だった。

毎朝、朝食をレストランで取り、薬を飲む。効いてください、そう念じながら飲んでいた。もし、悪化すれば、この重力区には出入り出来なくなるのだ。そして、地球に帰るといふ希望も絶たれる。それはいやだ。

ここは仮の宿。あたしは帰る。約束したんだ。

GDOには負けない。運命なんかには屈しない。

あたしは帰る。

一週間が過ぎた。検査の日だ。

麻里は、ときどきしながら、採血を受けた。不安げな表情を見て、注射をしている登美子が励ました。

「大丈夫よ。江上先生は、冷静で慎重な人よ。自信がなければ、新しい治療をすぐに試したりはしないわ」

麻里は登美子の顔を見上げた。

「がんばりましょう。麻里ちゃん」

麻里は頷いた。

午後に検査結果が出て、麻里は診察室に呼ばれた。

「…」

美知留は検査結果をコンピュータで見ながら、ため息をついた。

「下がってるわ。活性型ビタミンD3は先週より下がっている」

麻里は苦しくなった。胸の中で、いつも否定し続けてきた絶望という波が、防波堤を越えて押し寄せてきそつで、恐ろしかった。

大丈夫。きつと大丈夫。自分に言い聞かせた。

「でも、早とちりしないで、これだけでは、まだ何とも判断できないわ」美知留が言った。

二週目も、活性型ビタミンD₃の濃度は下がり続けていた。
「先生、どうということなんでしよう」麻里はさすがに尋ねた。
美知留はデータを睨み付けて、首を横に振った。
「まだよ。まだ。治療を続けます」

三週目が来た。

「どうですか」検査結果を見ながら何も言わない美知留に、麻里が尋ねた。

「…」

「先生」

「…下がりかたは先週ほどではないけど、今週も、さらに活性型ビタミンD₃が下がったわ」

麻里はショックを受けた。心が折れそうだった。

「それと、骨の脆弱化が始まったようね。骨密度が下がり出してる」

「…」

「でも、まだよ。この治療プランは二ヶ月で組んでいます。まだ半分も来てないのよ。あきらめないで」

しかし、麻里は、部屋に帰り、ベッドにもぐって泣き始めた。

だめなんだ。もう、自分は、降りられない汽車に乗ってしまったているんだ。

ひとしきり泣いた後、麻里は、コンピュータを起動して、両親に映像通信のコールを行った。

「麻里、調子はどう」母の葉子が笑顔で現れた。

麻里は、今までずっと秘密にしてきたことを打ち明けた。

「お母さん。黙っていてごめんね。実は、あたし、もうGDOを発症してしまったの。今週に入って、骨も溶け始めたよ」

画面の葉子の顔から笑みが消えた。

二人とも、少しの間、黙っていた。

「麻里、しっかりしなさい」泣くかと思いきや、葉子は麻里を励まし

た。

「発症しても、それは単なる通過点なのよ。あなたには、まだまだ生きていける環境が整っているんだから、そんなに深刻に受けとめてはだめよ」

麻里はまた泣き出した。あたしは、帰るって言ったのに。約束を守らなきゃいけないのに…。

「麻里、麻里が生きているといっただけで、お母さんたちはとても幸せなのよ。泣くのは止めなさい」

「うん…、わかった」

いくつか話をして、通信を終えた。

麻里は、発症を打ち明けたことで、少し気持ちが楽になった。だが、通信終了の後、葉子が泣き崩れたことを、麻里は知らない…。

ここで負けてなるものか。毎日を送りながら、麻里は再び自分を奮い立たせた。

あたしは帰る。約束を守る。

四週目の検査日が来た。

採血の後、結果を聞きに診察室を訪れた。

「麻里さん」美知留は静かに言った。

「はい」

「止まったわ」

「え？」

「活性型ビタミンD₃の下降が止まったの。今週は横ばいよ。ただ、変に期待はしないで。一時的に、濃度が横ばいになることはあり得るから。それに、副甲状腺ホルモンの濃度のほうは上がり続けていて、骨を溶かす作用は勢いついてきているわ。でも活性型ビタミンD₃が今まで下がっていたけど、これから上がり出す可能性が出てきた、とは言えるわ」

麻里は真剣な顔で頷いた。期待はしない。だが、失望もしない。あたしは自分の体を信じる。

そして、あきらめない。あたしは帰るんだ。

五週目が来た。

診察室で、美知留は麻里に言った。

「初めて活性型ビタミンD₃が上がったわ。ただ、副甲状腺ホルモンも上がり続けているので、言ってみれば、両者がせめぎ合っている状態ね」

上がった！ 活性型ビタミンD₃が上がったのだ。麻里は、消えないうちに大切に守ってきた希望の灯火が、少しだけ勢いを増したのを感じた。

大丈夫。きつとうまくいく。あたしは帰るんだ。

* * *

六週目からの展開は、劇的だった。

活性型ビタミンD₃は勢いをつけながら上がり続け、副甲状腺ホルモンは下降に転じた。

テスト終了の八週目で活性型ビタミンD₃が正常値まで戻った。もちろん、GDOの臨床データでこのような結果が出たのは、世界中で麻里が初めてだった。

美知留は麻里に告げた。

「ほぼ八割がた、ビタミンKの投与は効果があると見ていいでしょう。今後はテストではなく正式な治療として、ビタミンK投与を続けます」

麻里は、テスト開始以来、初めて満面の笑顔を見せて喜んだ。

「先生……」

「麻里さん、あなたのお手柄よ。わたしは、他の患者さんにも、この治療を開始するつもりよ」

麻里は涙ぐんだ。あたしは負けなかった。自分を信じて頑張ってきたけど、それは間違いじゃなかったんだ。

麻里は順調に回復していった。

骨の脆弱化も止まり、四ヶ月後には再生作用によって骨密度が正常な状態まで回復した。

活性型ビタミンD₃と副甲状腺ホルモンの濃度も正常な状態になり、体の中で、カルシウムのバランスが健康な状態になっていた。

江上美知留は、麻里に、再び重力区でトレーニングを行うよう指示した。

* * *

二年が過ぎた。麻里は十六歳になった。いまはすっかり健常者と変わらない体になっていた。

ある日、ジミーが会いに来た。ジミーもビタミンK投与を受けていて、もう十七歳になったのにGDOを発症していない。

「マリ、しばらく」

「ジミー、娯楽室で映画ばかり観てるって聞いたけど、たまには顔を出してよ」

「ははは、ごめん」

麻里もジミーも、明るく笑った。GDO患者同士が、こんなに楽しく笑い合える日が来るとは、誰も思わなかっただろう。二人ともそれぞれ、GDOの恐怖から解放された喜びで満ちあふれていた。

「聞いた？ きょう、アンソニーがエアフロート室から出てくるんだ」「えっ」

「エアフロート室は、入ることはあっても、出ることはできない監獄『』、そこ陰口されてきたけど、アンソニーは、初めてエアフロート室から出るGDO患者になるんだよ」

「すーい」

「マリ」「ジミーは、真顔になって麻里を見つめた。「君は英雄だよ。世界中のGDO患者を闇から救い出した。ほくは、君と同じ時に『パシフィック』に乗船していることを誇りに思うよ」

「やめてよ。恥ずかしいじゃない」

「事実だよ。誰も認めるはずだ」
「もういいわ。それより、アンソニーに会いに行きましょうよ」
「そうだね」

二人はポッドに牽かれて病院区に向かった。エアフロート室が並ぶ病棟の途中に人だかりが出来ていた。病院のスタッフや患者たちだ。アンソニーのエアフロート室だった。

「プシュー」とドアが開いて、アンソニーが現れた。みんなが一斉に拍手した。十八歳になったアンソニーは、拍手の中で眼を閉じて深呼吸した。

「おめでとう、アンソニー」
「おめでとう」

初のエアフロート室退室患者となったアンソニーに、皆が、声をかけた。

麻里はポッドで人垣を飛び越えて、アンソニーの前に降り立った。

「マリ！」
「アンソニー、おめでとう」
「マリ、君のおかげだ。ありがとう！」アンソニーはがばつと麻里をハグした。

「ちよつと、放して、あなたまだ完全な体じゃないのよ。怪我してエアフロート室に戻りたいの？」
笑い声が湧いた。

麻里は、ポケットから純金のネックレスを取り出した。

「これ、返せる時を待っていたわ。お父さんとお母さんの話は、自分でひとに聞かせてあげてね」

宙に浮いて踊るネックレスを、アンソニーはしっかりとつかんだ。

「マリ…」アンソニーの瞳がうるんでいた。「二度と出られないと思っていた。君は奇跡を起こした」

また拍手が起こった。

「やめて下さい、皆さん。きょうの主演はアンソニーですよ」麻里が照れて声を荒げた。

* * *

「お正月だなあ」窓から見える地球を見ながら、麻里が呟いた。十三歳で『パシフィック』に移住してから四年になる。江上美知留の権限で、レストランでは何とお雑煮が登場した。「先生、強引だなあ」思い出してくすつと笑った。

電話が鳴った。

「はい、川内です」

「江上よ。夕方、診察室に来てくれる？ 四時に」

「はい、わかりました」

時間になって、診察室に行くと、ジムのケイトも呼ばれて来ていた。どうしてケイトが。麻里は不思議に思った。

美知留は言った。

「日本行きの手帳が出発する三ヶ月後を目処に、麻里さんを地球に帰還させます。そのための準備を初めてもらいます」

「！」

麻里は驚いた。

「先生、帰れるんですか、あたし」

「この二年間、予後の経過を見てきました。カルシウム・バランスは極めて安定しています。」

また、ビタミンK投与の臨床試験が地上でも行われ、満足のいく結果を得られたことにより、地上でも正規の治療法として認可されました。

麻里さんが帰還する条件は整ったと言えます。

あとは、四年間の『パシフィック』滞在で、地上生活に復帰出来るかどうかという問題が残るだけです。

ケイト、意見を聞かせて」

ケイトは、ジムでの麻里のファイルを開いた。

「筋力と関節の強度が、不足しています。地上向けに強化ウェイト・

トレーニングのメニューを組みたいと思います。三ヶ月間あれば、充分な体を作ることが出来るでしょう」

美知留は、

「それでは、なるべく早く、それをスタートして下さい。

麻里さん、わたしは、これまでのデータをまとめて、あなたとの共著で医学論文を発表するつもりよ。

学会が開かれる秋にはわたしも地上に一時帰還するわ。今度は重力のあるところで会いましょうね」

麻里の心が躍った。この仮の宿から帰れる。あたし、帰れるんだ。約束を果たせるんだ。

「先生、ありがとうございます」

「御礼を言うのはわたしの方よ。今までわたしの仕事は、GDOの患者さんを受け入れて、ただ生きながらえさせるだけだった。いつも心のどこかに無力感を抱えていたわ。でも、あなたは他のGDOキャリアのひとつとは違っていた。どんなに状況が悪くなっても、いつも前向きで、不治の病なのに決してあきらめなかった。そのひたむきさが、あなた自身を救い、他のGDOの患者さんたちを救ったのよ。

正直に言つと、わたしは、あなたの積極性に、ポッドのように手を引かれて、治療への確信を持つことが出来たの。御礼を言うのはわたしの方よ」

「先生……」

美知留は微笑をたたえて、麻里に頷いた。

20

川内健介は、夜、仕事から帰った。

「ただいま」

葉子の返事がない。

「葉子」

靴を脱ぎ、訝しげにリビングに入っていくと、コンピュータの前で、葉子がエプロンを顔に当ててすすり泣いていた。

「どうした！ 麻里に何かあったのか」
泣きながら、葉子は首を振った。

「一体、どうしたんだ」

「麻里が、麻里が帰ってくるの」

「なに！」

「…映像通信で、麻里が知らせてきて、そのあと、宇宙開発事業団からも連絡があつて、四月に帰還する『はるな』に麻里が乗船するって…」
「なんだって？」

健介は信じられなかった。

「…そのあと、麻里の主治医の先生からも映像通信があつて、地上でも問題なく暮らせるって教えて下さって、正式に『パシフィック』下船手続きを取るって仰しかったの。

あなた、これ、本当のことよね。わたし怖い。やっぱり間違いでした、って連絡が来るんじゃないかって思うと怖くてしょうがないの」

葉子は泣き続けた。

健介は、鞆を置くと、かがんで葉子の頭を抱きかかえた。

「…間違いないさ。三人から連絡があつて間違いないって、あるわけないさ」

2 1

国連担当官の山南が迎えに来た。

ブルーの船内服を着た麻里がポストンバッグとポッドを両手に持って、『パシフィック』の出口に立った。

江上美知留、作田登美子、ケイト、ジミー、アンソニーが見送りに来ていた。

「おめでとう、麻里さん」

「麻里ちゃん」

「マリ、おめでとう」

それぞれが別れの言葉を告げた。

「先生、みんな…」

笑って去るつもりだったが、そんな事は無理だった。麻里は、涙をこぼした。麻里の眼から、涙の丸い液滴が、四方八方にさまよい出ていく。

「あだし、ずっとここは仮の宿って自分に言い聞かせてきたんです。必ず帰るんだって。」

「だけど、『パシフィック』から出ていくんだと思うと、とても悲しいです。」

すっかり住み慣れた船だから。あたしのもつひとつの故郷だから。

みんなと別れたくない……」

美知留が言った。

「みんな、また会えるのよ。ジミーともアンソニーとも会えるのよ。あなたのおかげよ。」

みんな順々に、帰還していくことでしょう。

いつか地上で集まって再会しましょうね」

「ありがとうございます。みなさん、お元気で」

山南の後について、麻里は、顔を皆の方に向けたまま、ポッドをスタートさせた。一同は一斉に手を振った。

NISSの廊下を進んでいくと、第一ドッキング・ベイに『はるな』が待機していた。

山南が手を貸して、麻里は、出入口ハッチをくぐった。

「川内さん、お元気で」山南が笑顔で言った。

「お世話になりました」麻里は頭を下げた。

ハッチがロックされた。

『はるな』を固定していた、ベイのアームが伸びて、『はるな』を解放した。

機長が言った。

「それでは出発します。原子炉出力上昇、五〇パーセント、六〇パーセント……」

操縦席が振動し始めた。

「推進剤循環開始。原子炉出力八〇パーセント、九〇パーセント、発

進」

推進剤が激しく吹き出し、『はるな』は発進した。強力なGが襲う。体がシートに沈み込んだ。

地上の種子島管制室からの通信が入る。

「管制室です。『はるな』、進路を○・二度修正してください」

「了解」

窓の外には広大なユーラシア大陸が、千々に千切れた白い雲をまといながら広がっている。

麻里は、今から帰るんだ、という実感が湧いてきた。

「管制室です。入射角良好、三分二十三秒後に大気圏に突入します。」

『はるな』エンジンを停止してください」

「了解」

『はるな』は機種を上げ、腹から落下する格好で突入姿勢をとった。

『はるな』の腹部には耐熱炭素強化セラミックスのタイヤが隙間無く貼られ、これが、大気との摩擦熱から『はるな』を守るのだ。

窓の外の青い水平線が、次第に明るくなり、やがてオレンジ色の光に包まれた。摩擦熱で起きた火炎が『はるな』のボディをすっぽり覆った。

操縦室は激しい振動に襲われ、ガタガタと絶え間ない騒音が鳴り響いた。

2 2

今年の桜前線は、例年よりひと月遅いという。健介と葉子は種子島に渡っていた。

種子島のシャトル帰還センターは、まぶしい太陽に照らされていた。センターの前には、桜並木が鮮やかに咲き誇っていた。葉子は、健介と歩きながら、ピンクの花々を見上げていた。麻里が生まれて以来、ずっと忌み嫌っていたこの風景を、きょう初めて、温かな喜びと共に眺めることができた。こんな日が来るなど、ただの一度も、想像したことすらなかった。麻里が帰ってくる。

センターに入ると、夫婦はやや緊張しながら、時がくるのを待った。

「管制室です。『はるな』 大気圏突入中。通信は遮断しています」 管制室のアナウンスが流れていた。

五分ほど経って、

「管制室です。通信再開、進路良好、『はるな』 間もなく進入コースに入ります。エンジンを再点火してください」

「『はるな』です。了解」

青空に鋭い輝点が現れ、減速しながら、降下してきた。 空気を突き破るようなエンジンの轟音を響かせて、赤い機体がぐんぐんと大きくなる。『はるな』だ。

滑走路の端に着地した『はるな』は、猛スピードで走りながらスラストを逆噴射して減速した。

やがて滑走路の中央で止まった。エンジンが停止して静かになった。整備員が操作するタラップ車が機体に近づき、出入口ハッチに接した。それを追うように、二台のジープが『はるな』に近づいていった。ハッチのドアが開き、ブルーの船内服を着た搭乗員たちが降りてきた。

部外者の健介と葉子は、センターのゲートから外へは出ることを許されず、手をかざして様子をうかがっていた。

二台のジープは搭乗員を乗せて、センターの建屋に走ってきて停まった。

ひとり、ふたりと、ジープから降りた搭乗員がゲートに近づいてくる。

最後に、いまは十七歳となった麻里が降りてきた。ずいぶん背が伸びている。ゆつくりと健介たちに歩み寄ってくる。

二人とも何も言えなかった。激しく脈打つ鼓動が耳元で響いている。この瞬間でさえ、現実の出来事に思えない。

だが、間違いなく、麻里だった。懐かしい本物の麻里の笑顔。

麻里が微笑みながら口を開いた。

「お父さん、お母さん。」

帰るって約束したでしょ。ただいま。

あたし、あんまり強情だから、運命の方があきれて逃げちゃったみたい……」

葉子が泣き出した。麻里も一転して、口を結んで涙ぐんだ。

「麻里、おかえり。よく帰ってきた」

健介と葉子は、麻里をぐいと抱き寄せた。しっかりと抱き合った三人は、もう二度と離れまいと心に誓っていた。

(了)